

研究主題

思考力・判断力を育てるための地理学習の研究
～地域教材を活かした授業づくり～

要約：現在学校教育に求められるのは、「確かな学力」を身につけさせることである。中でも、思考力・判断力を育てることは大きな課題の一つである。中学校の地理学習において、地域教材を活かした授業を行い、聞き取り調査を実施することによって、学習への関心が高まり、思考する意欲が向上し、情意面での理解が深まることが分かった。

キーワード：思考力・判断力、地域教材、聞き取り調査、集団思考

I はじめに

私たちの社会は変化が激しく、その中で様々な問題が生じている。予測が明確につきにくく先行き不透明なこれからの社会にあっては、その時々状況をふまえて、考えたり、判断したりする力が一層重要になってくる。現代の情報化社会では既存の知識や情報の変化は大きく、知識や情報を貯蔵するのではなく、入手した知識や情報を活用して、自ら課題を解決したり、新しいものを創造したりする力がより求められている。

II 主題・副題設定の理由

文部科学省は、「生きる力の育成」にあたり、知の側面としての「学ぶ意欲」や「思考力・判断力・表現力など」を含めた幅広い学力である「確かな学力」を身につけさせる必要性について提唱している。

石川県教育委員会実施の「平成17年度『基礎学力調査』報告書」では、小学校6年生は、社会的事象の意味を理解し自分の考えをまとめる力がやや不足しており、中学校3年生は、複数の資料を比較したり、関連づけて考察したりする力がやや不十分であるという問題点が指摘されている。

本校生徒の実態を見ると、「考える習慣」及び「社会的事象の見方や考え方」が充分身につけていない現状がある。授業の中で、クイズ形式の問題などには意欲的に答える。しかし、統計や資料などから、その特色や変化を読みとり、自分の考えを持つことに関しては苦手意識が強い。中には考えることを避け、友人や教師の思考に頼ってしまっている生徒もいる。社会科は「暗記教科」で単に覚えればよいと考えている生徒も多い。

これらのことから、思考力・判断力を育てることの大切さや必要性を強く感じ主題として設定した。

地理学習で扱う様々な資料には、生徒の関心や能力面から考えて身近に感じられない、実感できないものが多い。より具体的で身近にある資料や直接体験活動などから得た情報をもとに思考・判断させることが中学生の発達段階や情報収集、活用能力から見ても有効に働くと考えられる。

地域には生徒たちが思考・判断せざるを得ない状況に追い込まれていく教材が多く存在する。地域学習から学んだ主体的な態度は、将来の日本を担う公

民となる生徒にとって大きな役割を果たすことになる。自らすすんで考え、主体的に判断し、表現したり行動したりする資質や能力の基礎が地域学習を学ぶことで培われていくと考え副題として設定した。

III 研究の目的

中学校の地理学習において、地域教材を活用する授業を通して、思考力・判断力を育てる学習指導のあり方を探る。

IV 研究の方法

(1) 思考力・判断力の捉えと思考力・判断力を育てるための授業構想を練る。

(2) 地域教材を活かした思考力・判断力を育てる授業実践をする。

(3) 実践結果をもとに検証する。

V 授業実践に向けて

(1) 思考力・判断力とは

①社会科とはどのような教科か

社会科の究極のねらいは「公民的な資質の基礎を養う」ことである。「公民」には、市民社会の一員としての市民と、国家の構成員としての国民という2つの意味がある。社会科を公民的資質の基礎を養うという観点から見ると、単なる国家の構成員の国民としてではなく、参政権を有する市民として捉えた方がよい。「国際社会において、日本人として主体的、創造的に生きていくために必要な資質」が公民的資質であるならば、社会科を通して地域社会や国家、国際社会の一員として、主体的・創造的に生きていくための「生き方」について考え、学ぶということになる。言い換えれば、「社会科は、社会認識を通して市民としてのあり方や生き方を学び、追究する教科」となる。

②社会科における思考力・判断力とは

平成10年版学習指導要領の改善の方針として、「生きる力を育てる」ことを基本にし、「自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの資質能力、問題の発見と課題能力、学び方などの学習技能能力などを身につける」ことを大切にしている。そのため教科目標として思考力・判断力を育てることの重要性がはっきり明示されるようになった。また、思考力・判断力を育てるための留意点として、「社会的事象を多面的・多角的に考察すること」「判断、理解に当た

っては『公正さ』を大切にすることが示されている。」

しかし、「社会科における思考力・判断力とは何か」については、学習指導要領には明確な定義がなされていない。そこで先行研究より検討した。

特に、池田（1995）の思考力・判断力を測定するという観点からの捉えは大変参考になった。以下に示す。

思考の結果生み出された成果 (outcome) よりも、思考過程 (process) そのものが測定対象になる。正解の決まった課題よりも、解はいくつでもありうるような、debatable な課題のほうが適している。判断力は問題解決に際して、いくつかの選択肢を用意し、その中から最適な選択肢を選んで、自分の意志決定を行う力である。その意志決定にいたるまでの選択の論拠の合理性などが、判断力を評価する要素になる。衝動的な、選択肢なしでの意志決定では判断力は働かない。(中学校思考力・判断力 北尾倫彦編集 執筆者 池田 央[図書文化 1995] p142-145 より)

この考え方を参考にして、今回の研究における社会的な思考力・判断力を以下のように定義した。

<社会的な思考力>

社会的事象に関する問題を解決する際、既存の知識や経験などを関係づけ、ある結論を得ようとする過程で働く力

<社会的な判断力>

社会的事象に関する問題を解決する際、最適な選択肢を選ぶために、ある根拠に基づいて、自分の意志決定を行う力

③社会的な思考力・判断力を育てるために

生徒に思考・判断させるためには、学習に対する関心や意欲を向上させることが大前提である。また、生徒の学習能力への配慮も必要になる。

特に地理で学習する内容の多くは、見たことも行っていない地域の自然・産業や、人々の生活などである。教科書や地図帳、資料集を読んだだけでは、そのイメージは浮かびにくい。関心・意欲、能力という観点から考えると、より身近なもの、よりやさしいもの、過去に見たり聞いたりしたことのあるものなど、生徒に具体的なイメージを持たせられるような教材開発が必要になる。

そこで、着目したものが「地域教材」である。

身近で現実性のある教材であれば生徒も考えたいはずである。

先行研究から考えた思考力・判断力を育てるためのキーワードを以下に示すことにする。

課題解決学習、教材＝身近なもの、地域教材、関心・意欲、能力、資料活用、直接体験、解決的な思考(発散的思考)、根拠、関わり合う学び合う場、ゆさぶり発問

(2) 授業構想

①アンケート調査の対象と内容

白山市立光野中学校〔対象は1年生118名、2年生127名、3年生91名〕で8月に実施した。

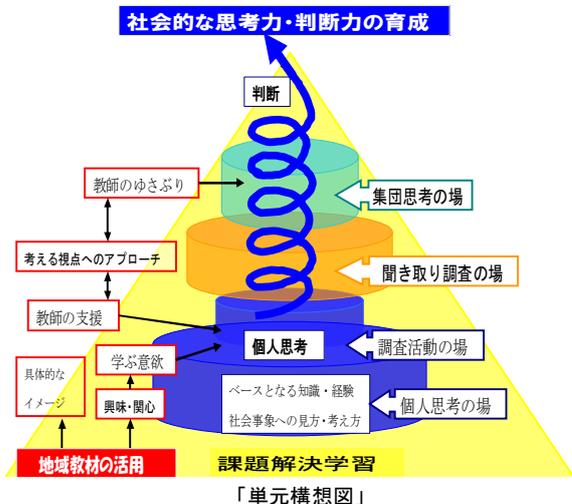
②アンケート調査の結果

社会科を「暗記」、「難しい」と捉えている生徒が多数いた。そのためか社会科の勉強が「好きだ、どちらかと言えば好きだ」と答えた生徒は4割で、残りの6割は否定的であった。歴史学習は好むが、地理学習は好まない傾向にあった。単純なクイズ形式の問題は好むが、資料やグラフなどを見て思考することは嫌うことも分かった。調べ学習に関しては、コンピューターの活用は好むが、地域に出ることへの関心は低かった。

③アンケート調査の結果を踏まえた授業構想

アンケートの結果の分析から、「地域教材を活かした授業」を行う上で考慮すべきことと必要な具体的手立てを考えてみた。

- ①社会科学習への関心・意欲を高めるために
 - ・社会的事象への興味・関心を持たせるための教材の工夫(クイズ形式の問題と食との関わりを持たせて)
 - ・関心の高まりから課題意識が持てるような教材の工夫(イメージが湧くような視覚教材及び調べ学習のためのコンピューターを活用した自作教材)
- ②地域教材を活用し、思考力・判断力を育てるために
 - ・地域の現状を知る場の設定(自作教材を活用した情報収集)
 - ・地域に出て調べることの必要性を感じる学習の展開
 - ・地域での直接体験(今回は聞き取り調査)とそこから得られた情報をもとに思考し、判断をする場の設定
- ③多面的・多角的な思考を促すために
 - ・シンキングシートの活用→考える視点一覧表の提示
 - ・集団思考の場の設定



VI 授業実践

(1) 単元のねらい

地域教材を活かした授業を通して、社会的事象に対する関心を高め、思考するための視点を広げ、思考・判断の質的深まりを目指す。

(2) 単元計画(学習活動を示す)

2学年の第3編、第1章さまざまな面から見た日本の中の、「変化する日本の農業」で実践することを考え、以下のように計画した。

- 1時 白山市から田んぼが消える!?農家が消えてしまう!?
課題：白山市の農家の未来を考えよう
～われわれの食生活にも目を向けながら～
- 2時 白山市の農業の特色や変化について調べよう
- 3時 聞き取り先について調べよう
- 4時 聞き取り調査項目をまとめよう
- 5時 聞き取り調査に出かけよう

- 6時 聞き取り調査に出かけよう
- 7時 聞き取り調査をまとめよう
- 8時 農家が離農していく原因と解決策を班で話し合おう
- 9時 他の班から情報を収集し、原因と解決策を考えよう

(3) 聞き取り調査による授業実践

①シンキングシートの活用

学習過程で、シンキングシート（思考の変化が分かるように各自の考えをその都度記入するB4サイズの用紙）を活用した。最初の授業時と最後の授業時に下記のことを考えさせた。

課題：白山市の農家の未来を考えよう
～われわれの食生活にも目を向けよう～

1. 白山市の農家が減っていく原因と田んぼが減っていく現状をどう考えるか 「困る」or「仕方ない」
2. 白山市の農家が農業をやめていく原因を考えよう
3. 解決策を考えよう

②聞き取り調査の事前準備

情報収集をしやすくするために、自作教材（コンピューターの活用）を準備した。農家の離農の原因を探るために、白山市の農業の現状を調べることから始めた。何人かの情報を集めて一枚のプリントを作成し現状について確認をした。しかし、農家が減っている原因について考察するもののはっきりとした答えは得られなかった。

そこで、聞き取り調査を提案した。「行きたい」と反応する生徒が多かった。否定的な発言はなかった。単元の導入から、学習への関心・意欲の向上を意識して実践してきたことが、聞き取り調査に繋がったと感じた。

③聞き取り調査の実施

聞き取り調査先として、白山市内の米穀店、JA松任、米作を中心とした専業農家、米以外の商品も多く生産している農業法人、兼業農家、七ヶ用水土地改良区の6カ所を選び、事前に依頼した。

当日の調査時間は移動を含め2時間とした。調査を終えてきた生徒たちからは「感動した」、「楽しかった」などの声が聞こえてきた。調査後のシンキングシートの感想の一部を以下に示す。

S1 担当の方に質問した時に「君ならどうする？」と聞かれ戸惑ったが、凄くためになった。農家の人たちの根性がわかった。(農業法人)

S2 泣くほど誇りを持って仕事をしている米屋さんの話を聞いて感動した。分かったことは、農家が減少していても食べる人も減少していること。小さな農家が減っても大きな農家がいれば特に困ることはないこと。(米穀店)

S3 農家の人の大変さが分かった。農家の人が農業をやめていく原因は、子どもに継がせたくないからだと言っていた。予想とは全然違っていた。(兼業農家)

感想では22人(70%)が、「・・・が分かった。」と記入していた。そのうちの半数が、「大変」、「すごい」、「感動」などと情意的な理解を表していた。また、聞き取り調査前と後の思考の変化をシンキングシートの記入内容をもとに比較してみた。最初の授業ではほとんどの生徒が、農家数の減少に対して「困る」と答えていたが、聞き取り調査後では10人(42%)が「仕方ない」に移動した。また、解決策についても聞き取りの影響を受けている生徒が8人(25%)いた。合わせると18人(58%)が聞き取り調査の影響を受けたことになる。

この変化を図で示すと下の図1になる。

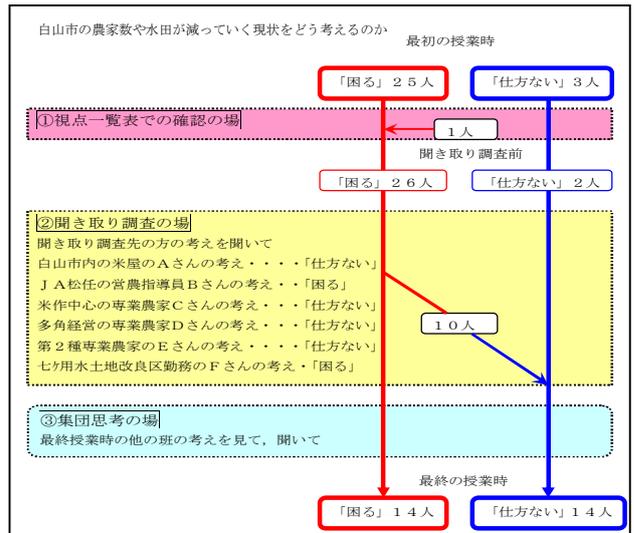


図1 「農家数の減少に対する『困る』『仕方ない』の回答人数の変化を示した図」

図1から、聞き取り調査が思考・判断をする上で大きく影響したことが分かった。

(4) 集団思考による授業実践

①視点一覧表から

2時間目に、視点一覧表（各自の思考の因果関係と全体の思考傾向を知覚的に確認するためにまとめたB4サイズの表）を活用した。(上は視点一覧表の全体像、その一部を拡大したものを下に示す)

上の表を生徒に提示し、農家が離農する原因を経済面にあると考えた人が17人いるのに対して、解決策を同じ視点で考えた人が3人しかいないことに着目させた。そこから生徒は解決策を原因と同じ視点で考えていないことに気づいていった。この一覧表をもとに学習を進めたことで論理的な思考の具体的な姿の理解を促すことができた。また、原因の視点が複数あることに気づいていく生徒もいた。

②聞き取り調査後の集団思考の場

<話し合いまでの流れ>

i. 集団で思考するために

各自による聞き取り調査の内容の整理



班員による聞き取り調査のまとめ (ポスター)

ii. 班での話し合い

付箋に記入した各自の考えを出し合う



班としての原因・解決策を考える (ポスター)

iii. ポスターセッション

新しい情報の入手 (他の班から)

↓ 質問対応係は他の班の質問に答える

新たな情報は自分の班のポスターへ

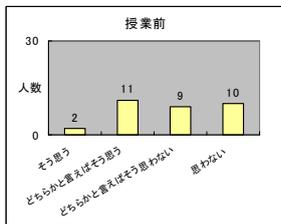
最終的な自分としての原因・解決策を考える

班での話し合いの場面では、原因や解決策を記入したポスターは完成させたが、班員が協議し1つの解答を出したというよりも、1人ないし2人の考えを記入した班が多かった。話し合いが上手くいかなかった原因を探ると、班員が話し合いの流れを理解していなかったこと、各自が付箋を勝手に貼っていったこと、6人班だったため話し合いに参加しない生徒が出てきたことがあげられる。

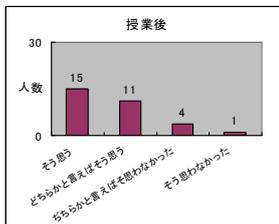
ポスターセッションの場面では、他の班から情報を入手することに関しては意図的に行っていた。しかし、持ち寄った情報をもとに集団で思考することは前時に上手く行かなかったため個人で考えることに変更した。ただ、ポスターセッションの中で他の班からの情報に影響を受け、解決策が変更した生徒は4人(13%)いた。

Ⅶ 単元を通しての考察

(1) アンケートによる分析

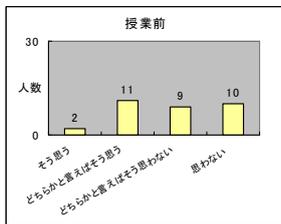


グラフ1 「社会の授業は楽しい」

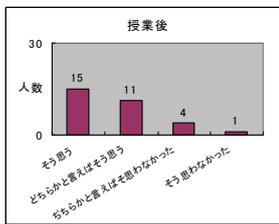


グラフ2 「授業は楽しかった」

上の1, 2のグラフから、授業後に楽しいと感じた生徒が増加した。楽しいと感じた理由は、聞き取り調査があったからであると答えた生徒が13人(41%)と最も多かった。

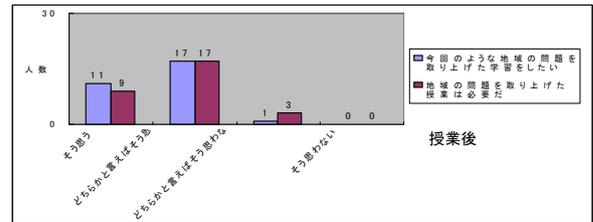


グラフ3 「資料やグラフなどを見て、その特色や変化について考えることは好きだ」



グラフ4 「農家の離農の原因やその解決策について、様々な資料や聞き取り調査などから積極的に考えた」

上の3, 4のグラフから、資料やグラフなどを見て考えることは好まないが、聞き取り調査から得た情報などから考えることは積極的であることが分かった。考えることを楽しい、またはどちらかと言えば楽しいと感じるようになった生徒も25人(80%)いた。



グラフ5 「地域学習への関心度と必要性について」

上の5のグラフから、今後地域学習をすることに對して肯定的な生徒が28人(96%)、地域学習の必要性を感じている生徒は26人(90%)いた。

(2) シンキングシート及び視点一覧表による分析

①原因と解決策の整合性

最初の授業時	11人(34%)
最終の授業時	23人(72%)

上の表を見ると、農家が離農する原因や解決策を考えていく中で、原因と整合性のある解決策を考えられた生徒が11人から23人に増えた。

②原因に対する視点の数

	1つ	2つ	3つ
最初の授業時	20人	3人	4人
最終の授業時	12人	11人	4人

生徒から挙げられた離農の原因は、経済面、競争面、後継者面、労働面、魅力面、その他(どれにも属さない)の6つであった。

上の表を見ると、原因を複合的に考えるようになり、視点が複数になった生徒が増加した。そのため、解決策も増加した。

③最終の授業時で、農家数が減少していくことに対して「困る」と答えた生徒が減り14人に、「仕方ない」と答えた生徒が増え14人になった。変更した理由は、聞き取り調査で農家の現状を知り、情意的な理解が進んだためである。しかし、最終的に根拠に基づいた判断に至っていない生徒が多く見られた。

Ⅷ 研究のまとめ

(1) 結論

①地域教材を活かした授業の中で、聞き取り調査を実施することによって生徒の関心・意欲が高まり、情意面での理解が深まることが分かった。

②地域教材を取り上げ、聞き取り調査からの情報をもとに思考させることは効果的であった。

③シンキングシート及び視点一覧表の活用は、論理的な思考に気づかせ、多角的に考えさせる上で効果的であった。

(2) 課題

今回は聞き取り調査を中心に思考・判断させた。今後はそれを統計資料やグラフから思考・判断させることにどう転移させていくかが課題である。

また、根拠に基づいた判断が不十分であったため、根拠を意識した学習展開、根拠が明確になるようなワークシートの工夫などが必要である。

話し合い活動では、集団思考を上手く機能させるための手立てや工夫を考えるなど教師側のスキル面の向上が必要である。